

四川省広元皇沢寺第28窟試論

京都大学 金 銀児

四川省広元市嘉陵江上流西岸に位置する広元皇沢寺石窟は、武士韞〈武則天の父〉が利州都督として赴任した際、その夫人である楊が発願した写心経洞が存在するなど、初唐時代仏教彫刻研究において重要な意義を持つ石窟である。このような重要性にもかかわらず、皇沢寺石窟についての研究は、同じく広元市嘉陵江上流東岸に位置している千仏崖石窟と一括りにして扱われるケースが多く、それらの調査報告書及び図録の中で簡単に触られている程度である。

従って発表者は、2004年、2005年に新しく紹介された写心経洞の資料と、2006年の現地調査を踏まえて、皇沢寺石窟第28窟の制作背景と制作意図について検討する。

まず、制作年代について、これまで漠然と隋末から初唐の間であるとされてきたが、資料に即して具体的に再検討し、制作年代が分かる皇沢寺石窟の第15窟と写心経洞との様式比較などによって、630年以前になることを明らかにしたい。

次に、皇沢寺石窟第28窟が持つ二重の図像構成について考察する。今回採り上げる皇沢寺石窟第28窟は、阿難、迦葉、八部衆の表現という観点からみれば釈迦仏として、左右菩薩像の表現という観点からみれば阿弥陀仏としても解釈できるという複雑な図像構成をみせている。このように釈迦仏と阿弥陀仏の図像の特徴を併せ持つ点について発表者は、図像が混同された結果用いられたのではなく、法雲の『法華経義記』、智顛(灌頂)の『請観音経疏』による本迹二門の視点から生み出されたものであるという積極的な解釈を提示したい。

さらに、皇沢寺石窟第28窟如来立像の耳璫と、施無畏与願印を結んだその左手に表現されている宝珠に着目したい。耳璫については、四川省茂県点将台摩崖の造像を参考にしながら、当時四川地域で行われていた如来像の荘嚴について検討する。宝珠の表現については、陝西省麟游慈善寺第2窟の如来立像との比較を行い、四川地域での如来像の荘嚴について検討する。また、耳璫と宝珠が表現された背景については、『大智度論』、『華嚴経』、『法苑珠林』などの文献資料を考察し、それらが単なる装身具ではなく、浄土の象徴として表現されたことを明らかにする。

このように広元皇沢寺第28窟をめぐる問題を検討することにより、初唐期四川省広元地域で行われた浄土関連造像の背景や、瑞像制作における荘嚴の問題が明らかにされると考えられる。また、初唐期の基準的な遺品が少ない現在において、長安と洛陽中心に論じられていた初唐仏教彫刻の視点を広げることができるだろう。